

スパルタクス反乱の評価をめぐる

——特にミシュエリン・ウトチェンコ説を中心に——

山 本 晴 樹

スパルタクス反乱はローマ史研究の中では魅力あるテーマとして非常に早くから取組まれた。¹⁾しかし、スパルタクス反乱を伝える古典報告の少なさと問題関心の稀薄さの故に、ローマ史を構成する重要問題の一つとして独自の研究対象とはなり難く、従前の研究に於てはしばしば等閑に付されてきた。このような研究状況を打破し、実証面ばかりでなく理論面に於ても画期的業績をあげたのがソヴェイエトの古代史家A・W・ミシュエリン(Mischulin)である。彼は従来のようにスパルタクス反乱をローマ史の中の単なる一つのトピックとして扱うのではなく、共和政末期に於ける奴隸制の矛盾を表現する、それ故にローマ奴隸制の本質に係り合うものとして取扱うべきことを主張した。即ち、彼によれば反乱は奴隸制と「奴隸所有者所有」(Sklauehalter-eigentum)そのものの廃棄をめざす、奴隸階級の奴隸所有者階級に對する「階級闘争」でありかつ「解放闘争」であった。従って、奴隸所有者階級に支配階級はこの反乱によって自己の政治形態の弱体性を痛感し、その結果カエサルといわゆる軍事独裁を現出させることとなる。³⁾このミシュエリンの見解はソヴェイエト及び東欧の古代史学界に大きな問題を提起し、その後スパルタクス反乱はローマ奴隸制史の最重要テーマの一つとみなされ、その研究は飛躍的に前進することとなった。S・L・ウトチェンコ(Uttschenko)もその一人である。彼は基

本的にはミシュエリン説を踏襲しつつも、さらにその上に、ミシュエリンの欠落点、つまりスパルタクス反乱がローマ「奴隸所有者社会」(Sklauehaltersgesellschaft)の経済基盤に与えた影響を指摘した。⁴⁾

このようなミシュエリン・ウトチェンコに代表されるソヴェイエト・東欧の古代史家のスパルタクス反乱研究に對しては、当然のこととして西欧古代史家の間から批判が出されることになる。その一人、J・フォークト(Vogt)は前二世紀後半から前一世紀前半にかけてローマ世界の各所で勃発した奴隸反乱⁵⁾を比較検討することによって、奴隸反乱の「構造」を究明しようとする。奴隸反乱は年代的に集中して勃発したが故に、何らかの統一的运动と考えられがちであるが、しかし、各反乱を詳細に検討してみると、それぞれが孤立的であったことが明らかになる。従って、反乱は統一的运动として奴隸制廃棄をめざしたもではなく、相互の接触を欠く孤立的状況の中で、かつて奪われた自由を再び獲得しようとする運動であった。それ故、奴隸所有者は奴隸反乱によって、奴隸制に危機感をいだくことはなく、またそれに真剣に對応することもなかった。⁶⁾フォークトのこの見解はS・ラウファー(Lauffer)によって更に発展させられる。ラウファーはまず従来のスパルタクス反乱研究を奴隸制の悪しき「現代化」(Modernisierung)としてとらえ、「事象の歴史的距離」(die geschichtliche Distanz der Dinge)を顧慮しなければならぬと言ふ。そして、スパルタクス

反乱を含む奴隸反乱を次のように理解する。即ち、奴隸反乱は共和政末期という政治的危機の状況と、奴隸人口の過度の集中という事実を前提として勃発したものであって、本質的に「自然発生的」なものである。従って、奴隸反乱に参加した奴隸たちは、何らかの階級意識をもって振舞ったものではなく、単に自己の奴隸状況に耐ええなかつたものであり、奪われた自由を渴望したものであった。たとえその奴隸たちによって一つの体制が打ち建てられたとしても、それは現存する支配体制の模倣にすぎず、そこに於ては奴隸制は廃棄されることなく温存された。従って、奴隸反乱がこのようなものであってみれば、それが現存する支配体制に何らかの影響を与えることはありえなかつた。ラウファアの見解は以上であるが、彼の見解はフォークトのそれとともに、階級闘争を前面に押出すソヴィエト・東欧の古代史家のそれと鋭く対立することになる。この両見解の対立は、スパルタクス反乱研究を世界的規模で進展させる契機となった。

このような状況の中で、ソヴィエト・東欧の古代史家に抛りつつも、西欧古代史家のそれに歩み寄りを見せたのがE・M・シュタエルマン(Schtajerman)である。彼女は西欧古代史家の成果をも顧慮しながら奴隸反乱研究を展開しているが、それによれば、奴隸反乱に於て奴隸が望んだのは奴隸制の廃棄ではなく、自由の獲得であった。そして奴隸反乱はフォークトの言う如く、統一性・連帯性を欠いたきわめて孤立的なものでしかなかった。従ってこの点では、シュタエルマンはフォークト・ラウファア説と一致する。しかし、奴隸反乱を窮極的に奴隸所有者と農業奴隸の間で闘われた階級闘争と規定することでは異なる。ただ彼女の場合、奴隸反乱の影響をミシューリン・ウトチェンコ説のように、反乱直後の状況の中に求めようとはせず、長期的パースペクティブの中で把握しようとしている。総じて言えば、シュタエルマンの奴隸反乱に関する理解は、精緻な実証研究に支えられ、社会主義国に於ける従前の研究に比してかなり柔軟である。

さて、わが国に於けるスパルタクス反乱研究は、専ら土井正興氏によって進められてきた。土井氏の立場はソヴィエト・東欧の古代史家のそれにきわめて近いように思われる。スパルタクス反乱はミシューリンの言う如く、奴隸制と奴隸所有者的「所有」の廃棄をめざす階級闘争であり、従って、この反乱は共和政末期の政治形態の変革に決定的影響を及ぼした、と見るのが土井氏の立場である。土井氏の研究は従来史料上の制約から解明されえなかつた箇所を、世界的観点に立つ史料の読み直しにより解明し、そのことによって西欧古代史家の立場を批判的に克服しようとしてきている。

以上スパルタクス反乱の研究状況を概観したわけであるが、われわれはそこから大きく三つの立場を引き出すことができるであろう。第一はミシューリン・ウトチェンコに代表されるソヴィエト・東欧の古代史家の立場、第二はフォークト・ラウファアに代表される西欧古代史家の立場、第三はシュタエルマン・土井氏に代表される前二者を克服しようとする立場である。これら三つの立場はまた、それぞれ五〇年代、六〇年代、七〇年代の研究動向とも平行関係にあるように思われる。それぞれの立場はそれぞれの年代にそれぞれのスパルタクス反乱像を提示した。そしてこのことが、研究の発展の軌跡として理解されたわけである。しかしながら、まさしくこのことがスパルタクス反乱研究の錯綜を生んだようにも思われる。スパルタクス反乱研究が停滞的現象を見せ始めたと言われる現在、われわれは更なる研究の進展を期するためにはここで今一度改めてスパルタクス反乱の研究史をふり返り、従前の研究に於ける欠落点を明確化する必要があるのではなからうか。本稿はそのためにまず、ミシューリン・ウトチェンコ説に代表される五〇年代の第一の立場を再検討するものである。

二

ミシューリンのスパルタクス反乱研究は一九三六年にロシア語原本

が刊行され、一九五二年にドイツ語訳された著書『スパルタクス——大奴隸反乱史概要——』によって知られうる。以下この著書に沿って今一步踏み込んで述べることにする。ミシュエーリンのスパルタクス反乱研究でまず注目しなければならないのは反乱軍の構成に關してである。従来、反乱軍の構成に關しては民族的構成の観点が支配的であった。即ち、反乱軍は主にトラキア出身の奴隸とガリア・ゲルマニア出身の奴隸とで構成され、前者がスパルタクスに、後者がクリスクスに率いられた。後のクリスクスのスパルタクスからの離反は、従って民族的対立として理解される。そして、この民族的対立こそがスパルタクス軍の敗因であったとされるのである。¹⁰これに對してミシュエーリンは、スパルタクスとクリスクス兩軍の中に、それぞれの民族が混在している事実を指摘し、民族的構成の観点を拒け、社会的構成の観点を打ち出している。それによれば、反乱軍は奴隸と小農民という二つの社会層によって構成されていた。そして奴隸はスパルタクスによって、小農民はクリスクスによって率いられた。従ってクリスクスのスパルタクスからの離反は二つの社会層の対立として説明されることになる。即ち、奴隸は反乱によって、奴隸制と奴隸所有者の「所有」の廃棄をめざし、一方小農民は大土地所有者の追放と土地の獲得及び再配分をめざしたからである。そしてこの利害の対立は当時の状況では統合されることはなく、反乱軍内部の分裂につながり、その敗因となった。¹¹

ミシュエーリンの研究で注目されるべきもう一つの点はスパルタクス死後の反乱軍の動向である。従来スパルタクスの死をもって反乱の叙述がうち切られていただけに、この面に於ける彼の言及は評価されねばならない。それによれば奴隸反乱はその指導者スパルタクスの死をもって終ったのではなく、彼の死後も殘党によって戦い続けられた。特に南イタリアでは反乱軍は長く影響を留めたことが指摘されている。¹²またミシュエーリンはスパルタクス反乱の特徴として、地域的連帯を指摘している。とりわけシキリアではイタリアに近接しているという地

理的条件の他に、その地で過去二度の大奴隸反乱が勃発した、という歴史的条件が加わって、スパルタクス反乱の支持者が多数見出された。¹³更にミシュエーリンは当時南イタリア沿岸に出没していた海賊の中にもスパルタクス反乱の支持者を見出している。¹⁴このような広範な支持者によってスパルタクス反乱は闘われたというのである。

最後に、ミシュエーリンはスパルタクス反乱とその歴史の意義を次のように結論づける。「この闘争は奴隸制の桎梏から脱しようとする人々を動かし、ローマ奴隸制社会を長くその根底において動揺させた。この反乱はその目的を達成しなかったとしても、しかしそれは奴隸所有者体制 (Skavenhalterordnung) をくぐがえし、共和政の政治状況に深刻な変更を生じさせた。そしてそのことにより共和政の避けえない没落を早めさせた。奴隸所有者の政策はますます奴隸所有者体制の堅持のための闘争に對して総力を結集するようになった。従って、その後ローマに於ては共和政の内部改革に努める政治家が全面に出てきた。スパルタクス反乱後間もなく、奴隸所有者の独裁を達成するための闘争は激烈になった。奴隸所有者の独裁にこそローマの国家体制を否定しようとする社会的動揺の打開策があると思われたのである。最初の三頭政治の達成のちユリウス・カエサルは血なまぐさい派閥抗争において、ローマの独裁的支配者として権力を握った。彼は軍事独裁を達成し、ローマ共和政の古い民主体制を除去したのである。今や奴隸所有者階級は奴隸の革命的反乱に對する闘争に於て一つの新しい支配形態に移行したのである。」¹⁵と。

所でミシュエーリンのこのドイツ語訳に S・L・ウトチェンコは「スパルタクス反乱の歴史の意義」という序文を寄せ、ミシュエーリンのスパルタクス反乱研究を批判する。ウトチェンコはまずスパルタクス反乱軍の構成に關するミシュエーリンの見解に次のような疑問を發している。そもそも奴隸と自由農民との間に同盟なるものが成立しえたのか。彼によれば、自由農民はあくまでも當時に於ける支配階級Ⅱ奴

隷所有者階級であり、奴隷と自由農民とは基本的な対立関係にあったが故に、両者の同盟は「原理的に」(im Prinzip)不可能であった。それ故、ミシューリンの言うような反乱奴隷と自由農民との同盟は全く問題にはなりえない。(Deshalb kann gar keine Rede sein von einem Bündnis der aufständischen Sklaven mit der freien Bauernschaft)。

また、奴隷が反乱によって奴隷制の桎梏からの解放と奴隷所有者体制の廃棄を求めたのに対して、自由農民はただ土地の再配分のみを求め、奴隷所有者体制の枠内で土地と政治的権利のためにのみ戦ったが故に、如何なる場合でも自由農民が奴隷所有者体制の廃棄に関心を抱くが如きことはありえなかった。事実スパルタクス反乱軍に於ける自由農民はきわめて少数であり、それ故この運動に大きな影響を与えることはできなかつた。従って、ミシューリンが言うような二重の課題は存在せず、ただ奴隷の求める課題しかありえなかつた。そしてウトチェンコは、奴隷と自由農民の間に統一戦線(Einheitsfront)が成立しえなかつたことをこそスパルタクス反乱の敗因と見ている。¹⁷⁾

次にウトチェンコは、スパルタクス反乱のローマ共和政に与えた影響に関してミシューリンが指摘した、カエサルの軍事独裁の抬頭という点では全面的に賛成する。しかし、彼はミシューリンが最も重要な点、つまりスパルタクス反乱の「歴史的结果」としての、ローマ奴隷所有者社会の経済基盤に於ける「深刻かつ本質的な諸変化」を見落したとして批判し、それらの変化を次のように考へる。即ち、latifundiaの小分割化とその小作化、購売奴隷から出生奴隷(Vernae)への労働源の転換、大量の奴隷の解放、がそれである。そしてウトチェンコは、解放・ペクリウム・コロヌス制を反乱後成立した労働の搾取のより穏和な新しい形態として指摘している。¹⁸⁾

最後に、ウトチェンコはスパルタクス反乱の歴史的意義を次のように結論する。「スパルタクス指導下の大奴隷反乱は革命のゆっくり成長し、結集しつつある諸力を作動させる最初の一突きであつたとい

ことは明白なように思われる。従って、この反乱はローマ奴隷制社会のその後の運命にとって、きわめて重大な意味をもっている。最終的にはそれは、奴隷所有者経済(Sklavenhalterwirtschaft)の分野に決定的な変革を招いた。しかもそれはローマ奴隷所有者社会の政治的上部構造にまさしくきわめて著しい影響を与えた。われわれはそれ故に、この前一世紀の奴隷反乱をそれが敗北に終わったにしろ、奴隷所有者体制の基盤を最も強力に革命的に揺り動かしたものとみなし、そしてそれを、解放を求めて情熱的に闘った被抑圧階級の闘争の中に数え入れるあらゆる根拠をもっている。¹⁹⁾」

三

以上われわれは、ミシューリン・ウトチェンコに示された第一の立場を検討してきたわけであるが、なによりもまずスパルタクス反乱研究に期を画したミシューリンに対して、その業績を評価しなければならぬ。スパルタクス反乱がローマ奴隷制史研究ばかりではなく、ローマ史全体の研究にとってきわめて重要なテーマであることを指摘した功績は彼のものである。スパルタクス反乱の実質的研究は彼によって始まると言っても過言ではない。しかしながら、まさしくそれ故に、スパルタクス反乱研究の問題点もまた彼から始まると言わねばならない。というのも、確かにミシューリンは研究の先駆者として、スパルタクス反乱の諸側面を詳細に究明しようとしたわけであるが、しかし、この反乱のきわめて重要な歴史的意義であるローマ共和政への影響という点については、彼はただ政治形態の変革を指摘するのみであり、その変革過程を具体的に検証する作業を欠落させたのであつた。即ち、いかにしてローマ共和政はスパルタクス反乱の影響により帝政へ移行するかという観点がミシューリンには欠落したわけである。²⁰⁾ここにこそ、ミシューリンのスパルタクス研究の問題点があるように思われる。事情はウトチェンコに於ても同様である。なるほど彼はミシ

ユーリンよりも更に進んでスパルタクス反乱がローマ奴隷所有者社会の経済基盤に与えた諸変化を指摘するわけであるが、しかし、これらただ諸変化の事例を列挙するのみであり、諸変化の現出する過程、諸変化間の相互連関は全く説明されないのである。ウトチエンコにあってはまた、スパルタクス反乱のローマ共和政に与えた影響の具体的把握は欠落していると言わねばならない。従って、シムネーリン・ウトチエンコ説に示された第一の立場を検討した結果、われわれの課題として現われるものは、スパルタクス反乱のローマ共和政に与えた影響を、その過程に即して具体的に検証するという作業である。この作業を経て初めてわれわれは、ローマ共和政末期に於けるスパルタクス反乱の正当な評価に到達しようと思われる。

註

- (1) 土井正興「スパルタクス反乱論序説」法政大学出版局一九七七年(改訂増補版)巻末付録「スパルタクス反乱関係年表」(pp. 2—25)参照。Cf. Ditto, *Bibliography of Spartacus' Uprising* (1726—1976) Tokyo 1977.
- (2) スパルタクス反乱の史料としてわれわれに利用できるものは、主として Liv., *Per.* 95—97, *Plut.*, *Vit. Crass.* 8—11, *Pomp.* 21, *App. Bel. Civ.* I 116—120, *Flor.*, *Eph.* II 8 以下。
- (3) A. W. Mischulin, *Spartacus. Abriss der Geschichte der Grossen Sklavenaufstandes*, hr. u. eingel. von S. L. Utschenko, Berlin 1952, S. 73, 97. (ロシア語原本は一九三六年出版) シムネーリンの見解については後述。
- (4) S. L. Utschenko, Die historische Bedeutung des Spartacus-aufstandes, in: Mischulin, *a. a. O.* SS. 5-18. ウーチエンコの見解については後述。
- (5) フォークトによれば、共和政末期の奴隷反乱は前四〇—一七〇年の間に集中的に勃発したとされている。因みに代表的な反乱とその年代を

- あげると、第一次シキリア反乱(一三六/五—一三三年)、アリストニコス(Aristonikos)の反乱(一三三—一二九年)、第二次シキリア反乱(一〇四—一〇〇年)、スパルタクス反乱(七三—七一年)。
- (6) J. Vogt, Struktur der antiken Sklavenkriege, *Abh. Akad. d. Wiss. u. d. Lit.*, Mainz 1957, SS. 48—57.
- (7) S. Lauffer, Die Sklaverei in der griechisch-römischen Welt, *Extrait des Rapports du XI^e Congrès International des Sciences Historiques*, Stockholm 1960, S. 74ff.
- (8) E. M. Schlatterman, *Die Blütezeit der Sklavenwirtschaft in der römischen Republik*, Wiesbaden 1969, S. 189f., 214f., 260. (ロシア語原本は一九六四年刊行)
- (9) 土井氏の見解は最近出版された「スパルタクス反乱論序説(改訂増補版)」に集約されている。土井氏の見解に対する批判として、太田秀通「奴隷制と奴隷制社会について」『歴史学研究』四四七号、一九七七年参照。
- (10) スパルタクス反乱軍の構成を民族的観点から説明するものとして、代表的にはキイヤン説がある。Cf. Th. Mommsen, *Römische Geschichte*, III S. 83ff.
- (11) Mischulin, *a. a. O.* SS. 65—74. スパルタクス反乱に参加した小農民の意識については、シムネーリンは次のように述べている。「農民は歴史的發展のこの当時の段階に於て、土地問題の解決が、奴隷所有者社会の経済的諸関係及び奴隷制それ自体を清算する課題とは切り離されたことと意識をまた全く分けて置かねた(S. 74)」
- (12) *Ibid.*, SS. 86—91. Cf. Suet. II III: Ex praetura Macedoniae sortitus fugitivos, residuum Spartaci et Catiinae manum, Thurinum agrum tenentis in itinere delevit, negotio sibi in senatu extra ordinem dato.
- (13) *Ibid.*, S. 89ff. Cf. Cic. *Verr.* II V 10—15.
- (14) *Ibid.*, S. 93ff. Cf. Cic. *Verr.* II V passim.
- (15) *Ibid.*, S. 97.

- (16) 註(4)参照。なお筆者未見であるが Cf. S. L. Utchenko, *Der weltanschaulich-politische Kampf in Rom am Vorabend des Sturzes der Republik*, 1956. (ロシア語原本は一九五二年刊行)
- (17) *Ibid.*, S. 10. なおウトチェンコでは、クリスタスとスパルタクスの対立は、戦術上の単なる相違と理解されている。
- (18) *Ibid.*, S. 11f.
- (19) *Ibid.*, S. 12.
- (20) これに関して、土井氏の次の指摘は重要である。「……反乱の正確な位置すけのためには共和政末期の政治権力、社会構造などの分析が必要である……(中略)……かつ元老院の権力の基礎や元老院身分たる大土地所有者が、本稿(引用論文)で使っているいわゆる元老院主流ノビリタスに対して、実力者の抬頭以後どのような態度をとったか、かれらがいかなる形で実力者に対したのか、などの諸点が明らかにされなければならない。」(土井正興「スパルタクス反乱の政治史的意義についての覚え書」『法學志林』五八卷三・四号、一九六一年、一三〇頁。
- (21) スパルタクス反乱については、シキリア反乱の影響を究明したものと、馬場典明「ローマ共和政におけるシキリアの奴隸反乱と大土地所有制」『史淵』第七一輯がある。馬場氏は再度のシキリアの奴隸反乱によって、大土地所有が直営から賃借経営へ移行していることを指摘されている。この指摘はスパルタクス反乱後のイタリアの大土地所有の変革過程を究明する際きわめて示唆的である。